

## 新刊紹介

松村一人著

「辯證法とはどういうものか」

かつて詭辯として警戒の眼をもつてむかえられ、假象の論學として蔑視された辯證法はヘーゲルによつてはじめて眞の哲學的方法として確立された。ヘーゲル以來辯證法は現實を動的・具體的に把握する最も有力な論理とされ、單に哲學の領域のみならず、あらゆる世界事象の理解と發展のための武器とされた。そして辯證法の問題は現代の中心的課題をなしわが國においても「無の辯證法」を説く西田・田邊哲學をめぐる論争は山内・高橋兩氏をはじめ、はやくからなされてゐたのであるが、戦後唯物論の復興とともに「政治哲學の急務」・「懺悔道としての哲學」は辯證法論争の渦中におかれた。それは唯物論陣營からの觀念論批判としてみでなく、西田・田邊哲學の中に、「生けるものと死せるもの」を區別することにより西田・田邊哲學を克服し、西

田・田邊哲學から唯物論への接近を示す梅本克巳氏の如き主體性論や、辯證法的神學につらなるキリスト教神學からの批判等複雑な様相を呈してゐる。かかる現狀にあつて辯證法の根本的把握は錯綜した現代思想を處理するうえに役立つであらう。

辯證法はもはや常識化し、「辯證法的發展」・「辯證法的綜合」といふ言葉は日常の會話の中にたやすく用ひられてゐる。しかし大衆化は通俗化を招き、辯證法の三段階的圖式化をもつて能事足れりとするが如きは誤解の最たるものである。辯證法の公式化は心ある人々によつて屢々警告されながら今だに跡をたたぬのはなぜであらうか。それは辯證法そのもののもつ本性によると言はねばならぬ。なぜなら辯證法は概論的俯瞰を許さぬものだから、然るに辯證法的唯物論は大衆によつて正しく理解されることを目指しながら、誤解の闇に閉されてゐる今日、辯證法の正當な理解のための入門書は多くの人々から要求されながら困難なことであつた。すでに洛陽の紙價を高か

らしめた田邊氏の「哲學入門」があるにはあるが、それは氏の「絶對無」の辯證法につらぬかれ、殊にマルクスに關する所説は正鵠を缺いてゐる憾みなきを得ない。かかる時に「辯證法とはどういうものか」は辯證法の批判的解説書として唯物辯證法理解のためによき手引きとなるだらう。

本書は辯證法の解説であるとともに唯物論者松村氏の主張でもある。その敘述は「辯證法の本當の姿をたんに正面から辯證法に反する考えかたとくらべるだけでなく、多くの辯證法にまぎらわしく、しかもにせの辯證法にすぎない考えかたや、さらに辯證法の不充分的な淺い理解のしかたとくらべながら」展開されてゐる。そして同時に辯證法の論理的な諸問題の考察は現實の切實な具體的問題と結びつけ、現在の思想・理論・論理・論争などのうちで著者が生々と感じとつたものにその出發點をもつてゐる。

先づ著者は、神祕的辯證法と科學的辯證法とを「二つの辯證法」として區別し前者の例に田邊哲學をあげ、その非科學

性から説きおこしてゐる。そして「辯證法の洪水」の中で神祕的辯證法や辯證法の不十分な理解などと對決しながらマルクス・レーニンの科學的辯證法の眞の姿を示そうとする。第二章においては「政治哲學の急務」を材料とし、田邊氏の問題の立てかたに誤りのあることを指摘し無の辯證法においては「本來連帶的な全體」の中には對立などないように見えると言ひ、田邊辯證法は本來對立的でないものを對立させ（田邊氏においては本來對立的なものでないとして捕へられてゐる）、その對立を「無の象徵たる有」即ち天皇によつて解決する「對立の調和」であるとする。それは逆説的・神祕的構造をもち「階級調和をのぞみ支配階級への屈服をえらぶ姿」であるときめつけてゐる。そして神祕的辯證法に對して科學的辯證法を眞正面から對立させ、「對立の統一および闘争」の理論を生産力と生産關係の問題によせて説明してゐるのが第三章である。ブルジョアシーとプロレタリアートとの對立は資本主義社會が自らの胎内に發達させつつある自己否定の

エレメントであり、それは兩者の動的關係において理解されねばならない。そして新しい社會の必然をみちびきだすことは階級的利害の對立といふ面のみからではできない。「いかにそれが必然となるかは資本主義社會そのものの根本構造の分析にもとづいてなされねばならず、この課題の遂行者としての労働者階級の役割は、資本主義社會の發達そのもののうちに、いかにその解體と新しい諸條件が發達してくるかという全體的な關係のうえに、はじめて明かにされる。」辯證法はマルクスの言ふように「現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまたその否定的・必然的没落の理解を含み……その本質において批判的かつ革命的である。」

第四・五章ではギリシア哲學を取り上げ、その詭辯と折中主義の缺陷を指摘しつつ科學的辯證法の正しさを説いてゐる。ここでは、アリストテレスの「詭辯に轉化した辯證法」の批判は大きな意義をもつてゐるけれど、ヘラクレイトスの辯證法を正しい方向に發展させてゐない

ことを示してゐる。

第六・七章の「飛躍論と過渡期の問題」は、現在當面してゐる諸問題との關聯において重要な意味をもつてゐると思はれる。ここでは先づ、質的變化を抽象的な飛躍論で理解しようとする誤りを述べてゐる。質的變化は必ずしも突如として起るものではなく、變化は漸進的に行はれる場合もあり得るのであり、前の形態と後の形態との境界もはつきり示すことは困難である。だから抽象的飛躍論はこれを説明することはできない。現實には純粹な現象というものは存在せず、過渡期においては二重性格をもつてゐる。しかしそれは決して折衷主義のような二面論による動搖ではなく、「根本的に」は新しいものが主であり、古いものが従であるという理解を忘れてはならない。これは二つのものを並存させるものでない。尙、第七章における中間階級の二重性格の解明も見逃すことの出来ない問題を含んでゐる。第八章では「否定的否定」について、その圖式化を排し、肯定的理解を示してゐる。

「辯證法とはどういうものか」に答へるために著者は辯證法の諸學說との比較によつて科學的辯證法の正しさを説くのであるが、本書の基調をなすものは、資本主義社會の歴史的動向の遂行者としての労働者階級の役割を闡明するにある。

啓蒙的任務にたへ得るのに充分の内容と理論の展開をもつてゐる本書は、唯物辯證法の具體的理解とともに、古典研究の批判的態度と、ヘーゲルやマルクスの辯證法を探究することにより自己自らの足で歩むことを教へるだらう。(岩波新書)(御館)。

# 羽田博士 頌壽記念 東洋史論叢

## 羽田博士還曆記念會編

東洋史學界の耆宿羽田博士が還曆に達せられたのは、昭和十七年であつた。本書はその還曆記念會の事業の一つとして博士の知友門下の中、四十三篇の論文が集められて大成されたものである。戦後數年の混亂時代を経て、我が國が漸く講和の燭光を見出さんとする時にかかる論

叢が世におくられたことは、ただに我が東洋史學界の誇にとどまらず、文化國家の建設に一大巨歩を踏み出したことを意味するものであり、同時に又戦後特に關心の高まつて來た世界の東洋學に對して寄與することの少からざることを信じて疑はないものである。本書の體裁は、先づ博士の略歴の年表、並びに著作年表を初頭に掲げ、次に各氏の論文を收録し更にそれらの論文の概要を英文に翻譯して卷末に附し以て世界の學界の要請に應へてゐる。今一々の論文についてこれを紹介する煩をさけ、特に宗教關係の論文について簡單に紹介して見よう。

## 都利事斯經とその佚文 石田幹之助

唐の中葉、德宗の貞元年間(七八五—八〇四)印度の都利術と稱へられてゐた星占に通ずる李彌乾なるものが西天竺より支那につ

たへ、釋據公なるものが之を漢譯したのがこの都利事斯經である。この經は星占に據る運命判斷の書であり、唐代並びに宋一代を通じて行はれたものである。筆者はこの經が直接に印度から傳へられたものでなく一度イラン文化圈を経由して

支那に傳へられたものであらうと考察し更にこの經の佚文が我が平安朝末の記錄「宿曜運命錄」なる書に引かれてゐることを紹介されてゐる。

## 回鶻文普賢行願品殘卷 石濱純太郎

佛教文庫の第十四卷の「回鶻文觀音經」附錄第三のラドルフが校印した回鶻文佛教經典は、何經であるか詳かにされてゐなかつたのを、石濱氏はこれを校讀し、これが四十華嚴の普賢行願品の殘紙であることを紹介されたものである。

## 清朝宮廷薩滿教祠殿に就いて 井上以智爲

滿洲民族たる清朝がその三百年に亘る中國支配の間に於て、滿洲民族固有の風俗たる薩滿教を、如何に信仰し、如何に祭祀したかと言ふことは、容易に窺知し難い所である。本論文はかかる清朝固有の祭祀を「欽定滿洲祭神祭天典禮」なる資料を驅使して考察されるもので、その行事儀禮は複雑多様に亘るものであるが、之を大別して恒例祭と臨時祭として恒例祭は更に日祭、月祭、季祭、年祭があり臨時祭には求福祭があるとして、その各